

音楽鑑賞教育の新たな可能性 —横断的な授業の提案と実践—

伊 藤 綾

文部科学省が義務教育に定める「音楽」という教科は、演奏技術習得のための「表現」と、様々な作品を聴き知るための「鑑賞」に大きく二分されている。「鑑賞」という言葉の持つ受け身的な響きのためか、大学で音楽に関する講義を受講する生徒の中には、音楽を最初から最後まで通して聴き、その好き嫌いや、そこから得たイメージを感想として述べるものが「鑑賞」だと考えている者が少なくない。事実、彼らに聞いてみると、大学に入学するまでに受けた鑑賞教育は、ほとんどの場合上記のようなものであったと答える。趣味としての音楽鑑賞とは異なり、学問として音楽を鑑賞する際には、作品成立に関わる政治的、宗教的、そして作曲家の個人的背景を無視するわけにはいかない。また音楽は、美術や文学といった他の芸術とも関わりがあることも多い。そのような多角的な観点からの解説を加えながら楽曲を鑑賞させると、今まで想像さえつかなかった音楽作品の持つ多面性やメッセージ性に、生徒から驚きの声がかかることもしばしばだ。そして一様に、「もっと前からこのような音楽の聞き方を教わっていれば、鑑賞の授業も楽しかったのに。」という意見が出る。そのような声を耳にするたび、義務教育の現場では他分野と関連づけた多角的な鑑賞の授業を扱うことはカリキュラム上不可能なのだろうか、という疑問を抱いてきた。

そこで、平成20年に告示され、平成24年4月から完全実施される最も新しい『中学校学習指導要領』を紐解いてみると、そこには「鑑賞」という授業が長年抱えてきた上記の問題を解決しようという意図が見てとれ

る。そこでは、よりグローバルな視点を鑑賞に盛り込むことが求められており、総合的な学習のほか、道徳とも連携した授業が指示されている。

本論文ではまず、『中学校学習指導要領』の1989年3月告示（以後『旧学習指導要領』）、1998年告示、2003年一部改訂版（以後『現行学習指導要領』）、2008年3月告示、2010年11月一部改正版（以後『新学習指導要領』）を比較することにより、文部科学省の目指す新しい鑑賞の授業像を明確にし、それに従って他教科との関連性を意識した学習指導案を提示する。さらに、この指導案をもとに、宮城県松島町立中学校第2学年の生徒106名を対象に2時間の研究授業を行い、その結果から複数教科にまたがった横断的な音楽鑑賞教育の必要性和将来性について考察したい。

1. 学習指導要領における鑑賞指導法の変遷

冒頭で触れたとおり、これまでの学習指導要領における受け身型の鑑賞は、音楽を聴き知るという勉強に対する誤った方法論を生み出してきた。ここでは1989年から現在に至るまでの3つの学習指導要領の比較を通じて、従来型の鑑賞授業とそこからの脱却の課程を考察する。とりわけ注目すべき文言には、太字に下線を引き強調した。

まず、教科としての「目標」においては『新学習指導要領』で初めて、能力、感性、情操を養う他に、音楽鑑賞を通して音楽文化への理解を深めることが明記された。それを通して「[...] 様々な音楽がもつ固有の価値を尊重し、その多様性を理解できるようにするとともに、音や音楽によって、人は自己の心情をどのように表現してきたか、人と人とがどのように感情を伝え合い、共有し合ってきたかなどについて、生徒が実感できるように指導」¹ すべきであるとしている。

「学年の目標」には、『新学習指導要領』から全学年に対して「幅広

1 「中学校指導要領解説音楽編」、12頁。

表1 中学校旧・現行・新学習指導要領における「鑑賞」の扱い

	旧学習指導要領	現行学習指導要領	新学習指導要領
告示	1989年3月	1998年12月 (2003年12月一部改訂)	2008年3月 (2010年11月一部改正)
完全実施	1993年4月	2002年4月	2012年4月
第1目標	表現及び鑑賞の活動を通して、音楽性を伸ばすとともに、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養う。	表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。	表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、 <u>音楽文化についての理解を深め、豊かな</u> 情操を養う。
第1学年			
第2各学年 の目標および 内容			
1 目標 * 鑑賞に関する 記述のみ抜粋	(2) 多様な音楽に興味と関心をもたせるとともに、幅広い鑑賞の能力を養う。	(3) 多様な音楽に興味・関心をもち、幅広く鑑賞する能力を育てる。	(3) 多様な音楽のよさや美しさを味わい、幅広く <u>主体的に</u> 鑑賞する能力を育てる。
2 内容 B 鑑賞 (1) 鑑賞の活動を通して次の事項を指導する。	A 楽曲の雰囲気や曲想及び楽曲を特徴付けている諸要素の働きと曲想とのかかわりを感じ取ること。 イ 声や楽器の音色及びその組合せによる響きと	A 声や楽器の音色、リズム、旋律、和声を含む音と音とのかかわり合い、形式などの働きとそれらによって生み出される楽曲の雰囲気や曲想を感じ取って聴くこと。 イ 速度や強弱の働き及び	A 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。 イ 音楽の特徴を <u>その背景となる文化・歴史や他の芸術と</u>

	<p>効果を感じ取ること。</p> <p>ウ 我が国の音楽及び諸外国の民族音楽における楽器の音色や奏法と歌唱表現の特徴を感じ取ること。</p>	<p>それらによって生み出される楽曲の雰囲気や曲想の変化を感じ取って聴くこと。</p> <p>ウ 我が国の音楽及び世界の諸民族の音楽における楽器の音色や奏法と歌唱表現の特徴から音楽の多様性を感じ取って聴くこと。</p> <p>エ <u>音楽をその背景となる文化・歴史などとかかわらせて</u>聴くこと。</p>	<p><u>関連付けて</u>、鑑賞すること。</p> <p>ウ 我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。</p>
第 2、3 学年			
第 2 各学年の目標および内容			
1 目標	(2)音楽に対する総合的な	(3) 音楽に対する総合的な理	(3)多様な音楽に対する理解を
*鑑賞に関する	理解を深めるとともに、幅	解を深め、幅広く鑑賞する能	深め、幅広く <u>主体的に</u> 鑑賞する
記述のみ抜粋	広い鑑賞の能力を高める。	力を高める。	能力を高める。

2 内容	ア 楽曲全体の曲想を味わって聴くこと。	ア 声や楽器の音色、リズム、	ア 音楽を形づくっている要
		旋律、和声を含む音と音との	素や構造と曲想とのかかわり
B 鑑賞	イ 楽曲を特徴付けてい	かかわり合い、形式などの働	を理解して聴き、根拠をもっ
(1)鑑賞の活	る諸要素の働きと曲想と	きとそれらによって生み出	て批評するなどして、音楽の
動を通して次	のかかわりを理解して聴	される曲想とのかかわりを	よさや美しさを味わうこと。
の事項を指導	くこと。	理解して、楽曲全体を味わっ	イ 音楽の特徴を <u>その背景と</u>
する。	ウ 反復、変化、対照によ	て聴くこと。	<u>なる文化・歴史や他の芸術と</u>
	る楽曲の構成、声や楽器の	イ 速度や強弱の働き及びそ	<u>関連付けて</u> 理解して、鑑賞す
	音色及びその組合せによ	れらによって生み出される	ること。
	る響きと効果を理解して	曲想の変化を理解して聴く	ウ 我が国や郷土の伝統音楽
	聴くこと。	こと。	及び諸外国の様々な音楽の特
	エ 我が国及び諸外国の	ウ 我が国の音楽及び世界の	徴から音楽の多様性を理解し
	音楽について、 <u>およその時</u>	諸民族の音楽における楽器	て、鑑賞すること。
	<u>代的、地域的特徴を感じ取</u>	の音色や奏法と歌唱表現の	
	<u>ること。</u>	特徴から音楽の多様性を理	
	オ 音楽と <u>その他の芸術</u>	解して聴くこと。	
	<u>とのかかわりを総合的に</u>	エ 音楽を <u>その背景となる文</u>	
	<u>とらえること。</u>	<u>化・歴史や他の芸術とのかか</u>	
		<u>わりなどから、総合的に理解</u>	
		<u>して聴くこと。</u>	

<p>第3</p> <p>指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>1 指導計画の作成にあたっては次の事項に配慮するものとする。</p> <p>*鑑賞に関する記述のみ抜粋</p>	<p>(3) 第2の第2学年及び第3学年の内容については、第2学年においては音楽の仕組みを理解させることに、第3学年においては総合的に音楽をとらえさせることにそれぞれ重点を置いて扱うなど、学校や生徒の実態に応じ、効果的な指導ができるよう工夫すること。</p>	<p>(2) 第2の第2学年及び第3学年の内容については、生徒がより個性を生かした音楽活動を展開できるようにするため、興味・関心をもつ学習活動を選択できるようにするなど、学校や生徒の実態に応じ、効果的な指導ができるよう工夫すること。</p>	<p>(1) 第2の各学年の内容の〔共通事項〕は表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要なものであり、表現及び鑑賞の各活動において十分な指導が行われるよう工夫すること。</p> <p>(4) 第1章総則の第1の2¹及び第3章道德の第1²に示す道德教育の目標に基づき、<u>道德の時間などとの関連を考慮しながら</u>、第3章道德の第2³に示す内容について、音楽科の特質に応じて適切な指導をすること。</p>
<p>2 第2の内容の指導については、次の事項に配慮するものとする。</p> <p>*鑑賞に関する記述のみ抜粋</p>	<p>(8) 鑑賞教材のうち諸外国の民族音楽については、第1学年においては主としてアジア地域の民族音楽のうちから適切なものを選んで取り上げることとし、第2学年及び第3学年においては広く世界の民族音楽を取り上げるようにすること。</p> <p>(9) 音楽の記号、用語及び</p>	<p>(8) 各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、<u>楽曲の背景にある文化・歴史や他の芸術とのかかわりなどについて、必要な範囲で触れるにとどめること。</u></p> <p>(9) 音楽の諸要素とそれらの働きを表す記号や用語などについては、表現活動及び鑑賞活動を通して理解させるものとし、それぞれの指導のねら</p>	<p>(7) 各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、次のとおり取り扱うこと。</p> <p>ア 生徒が自己のイメージや思いを伝え合ったり、<u>他者の意図に共感したりできるようにするなどコミュニケーションを図る指導</u>を工夫すること。</p> <p>イ 適宜、自然音や環境音などについても取り扱い、音環</p>

	諸要素などについては、表現及び鑑賞の活動を通して理解させるものとし、それぞれの指導のねらいに即し、重点的に取り扱うこと。	いに即し、重点的に取り扱うこと。 (10) 鑑賞教材のうち世界の諸民族の音楽については、第1学年においては主としてアジア地域の諸民族の音楽のうちから適切なものを選んで取り上げるようにすること。 (11) 各学年の「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導に当たっては、適宜、自然音や環境音などについても取り扱うとともに、 <u>コンピュータや教育機器の活用も工夫すること。</u>	境への関心を高めたり、音や音楽が生活に果たす役割を考えさせたりするなど、生徒が <u>音や音楽と生活や社会とのかわりを実感できるような指導を工夫すること。また、コンピュータや教育機器の活用も工夫すること。</u>
--	--	--	--

1 『新学習指導要領』第1章、総則、第1、教育課程編成の一般方針2：学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏（い）敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓（ひら）く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。

道徳教育を進めるに当たっては、教師と生徒及び生徒相互の人間関係を深めるとともに、生徒が道徳的価値に基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、職場体験活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して生徒の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。その際、特に生徒が自他の生命を尊重し、規律ある生活ができ、自分の将来を考え、法やきまりの意義の理解を深め、主体的に社会の形成に参画し、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けるようにすることなどに配慮しなければならない。

2 『新学習指導要領』第3章、道徳、第1、道徳教育の目標：道徳教育の目標は、第1章総則の第1の2に示すところにより、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。

道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする。

く主体的に鑑賞する」という文言が盛り込まれ、これまでの受け身の鑑賞教育からの脱却の姿勢が明示されている。また、「幅広く」という文言は「多様な音楽を取り上げて、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取り、音楽の特徴をその背景となる風土や文化・歴史と関連付けるなどして鑑賞することを意味」² するとし、鑑賞を通してグローバル化を意識させる狙いがみられる。

「鑑賞の内容」に関しては、旧および現行までの学習指導要領では、音楽の背景にある文化や歴史との関わりについて、第2、3学年から触れることになっていたが、『新学習指導要領』では第1学年からすでにそれらと関連づけた指導をするよう明記されている。その理由として「音楽は、その背景となる文化・歴史や他の芸術から直接間接に影響を受けており、それが音楽の特徴となって表れている」³ ことが挙げられている。さらに『新学習指導要領』では「他の芸術とも関連づける」という文言が付け加えられ、より多角的な鑑賞授業の方針が強まったことが分かる。

「指導計画の作成にあたっての配慮事項」に関しては、『新学習指導要領』において初めて道徳と関連づける指示が明記された。また、総則⁴および道徳の目標⁵では、各教科や総合的な学習の時間との密接な関連性が記されており、とりわけ「音楽科の年間指導計画の作成などに際して、道徳教育の全体計画との関連、指導の内容及び時期等に配慮し、両者が相互

2 「中学校指導要領解説音楽編」、30頁。

3 「中学校指導要領解説音楽編」、45頁。

4 「新学習指導要領」第1章、総則、第1、教育課程編成の一般方針2「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」

5 「新学習指導要領」第3章、道徳、第1、道徳教育の目標「[...] 道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする。」

に効果を高め合うようにすることが大切である。」⁶としていることから、より横断的・総合的な教育を目指す文部科学省の意図が感じられる。

「学習内容の指導にあたっての配慮事項」では、『現行学習指導要領』からすでに、楽曲の背景などを意識した指導が指示されているが、その一方で「必要な範囲で触れるに留めること」という一文があることにより、他教科との関連性に深入りすべきではない、という印象を受ける。『新学習指導要領』においてはその但し書きが消え、音楽と社会との関わりを実感させる工夫や、他者との意見交換を重要視している。ここにも受け身的な鑑賞からの脱却と、授業の社会的意味を生徒に意識させる意図が見てとれる。

さらには、昨今の電子技術の発展に伴い、『現行学習指導要領』から授業におけるコンピュータや教育機器の活用が推薦されている点も重要である。

2. 「鑑賞」を通しての横断的・総合的な教育の可能性

『新学習指導要領』における「鑑賞」の変更事項は、これまでの漠然とした受け身の「鑑賞」からの脱却、さらには「鑑賞」を他教科や道徳および総合的な学習の時間と結び付けることによって、生徒たちにグローバルな視野を持たせることを目指している。

「総合的な学習の時間」が初めて登場した『現行学習指導要領』においてすでに、この時間は「横断的・総合的な学習」を行うものであることが明記されている。⁷『新学習指導要領』においてはさらに、この時間に対してひとつの章を設け、より具体的に目標、内容、内容の取り扱いを示している。⁸ ここで注目すべきは、新しく記載された「教科の枠

6 『中学校指導要領解説音楽編』、71頁。

7 『現行中学校学習指導要領』第1章、総則、第4、総合的な学習の時間の取扱い1参照。

8 『新学習指導要領』103頁参照。

を超えた横断的・総合的学習（傍点筆者）」を行うこと、という文言である⁹。現行では、学外での総合学習すなわち課外活動や地域交流に主眼がおかれている。新指導案はこれに加えて、教科間の枠を超えた授業の取り組み、すなわち学内での活動も提案しているのだ。これにより、それまでは教科としての優劣を付け、分けられていた、いわゆる技能4教科と主要5教科を関連させて授業を行うことが可能となり、すべての教科が意味のある学問であることを生徒に実感させることができる。この点に関しては『新学習指導要領』に関する解説においてもほとんど注目されていないが¹⁰、これこそがこれまでの鑑賞との最も大きく異なる点であり、また重要な転換点であろう。

したがって、この新しい指導要領のさらなる発展を目指すために、「総合的な学習の時間」を介しての横断的教育ではなく、全教科同士が直接に横断的なカリキュラムを組み、体系的に物事を教える制度の確立を提案したい。複数の教科が協力してカリキュラムを組むことにより、各教科の学習時間を合算し、ひとつの大きなテーマを様々な観点から時間をかけて取り組むことができるようになる。音楽と他教科との連携の例を挙げるならば、歴史の授業で扱っている時代と同時代に作曲された音楽を授業で取りあげる、作曲家の出生地や活躍した国の地理関係、数学の比率と楽器の大きさや構造に見る音程の関係、国語で取りあげた作家と同時代の作曲家および彼らの関係性、などその可能性は無限に考えられる。もちろん、音楽以外の教科間でも同様の手法が成り立つだろう。

9 『新学習指導要領』103頁、第4章 総合的な学習の時間、第3 指導計画の作成と内容の取扱い（2）参照。

10 『最新中等科音楽教育法』においても、音楽とその他の教科の関連について触れられているが、国語科との関連で、歌曲における詩と音楽の関係を考える例以外は抽象的な解説にとどまり、他教科との関連性の範囲も狭い。（中等科音楽教育研究会編、126-127頁参照。）

3. 横断的・総合的な鑑賞授業モデルの提案と実施

本章で提案する指導案は『新学習指導要領』に基づいて、「総合的な学習の時間」と結び付けたものである。さらに、従来のような学外活動ではなく、第2章で提唱した他教科との横断的教育をより意識したものである。

3. 1 ベートーヴェン《交響曲第6番「田園」》に見る

鑑賞教材としての有意性

本稿では、ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの《交響曲第6番》を主教材、《交響曲第5番》を副教材とする鑑賞授業を提案する。『現行学習指導要領』において《第5番》は補助教材として挙げられているうえ、耳になじみのある曲であることから、音楽の授業においても鑑賞教材として取り上げられる頻度が高い。今回研究授業を行った中学校でも、2年時の初めに《第5番》を通してソナタ形式を学んでいる。

これに対して《第6番》は、《第5番》と平行して作曲された、いわば「双子」の作品であるにも関わらず、楽曲形式や内容は全く異なっており、音楽史上も特異でありまた重要な作品である。したがって、聞き慣れた、または授業ですでに扱った《第5番》と比較しながら聴くことにより、生徒の興味を喚起できると考える。

また《第6番》は、その内容が指導案解説の示す鑑賞における指導のあり方に合致する部分が多い。具体的には、指導要領解説 ①「自然音や環境音について音楽とのかかわりにおいてとらえることは、音や音楽への興味・関心を一層養うことにつながっていく。」¹¹ および ③「音楽を形づくっている要素や構造の働きから生み出される曲想を感じ取って聴き、その音楽によって喚起されるイメージや感情を意識することが大切

11 『中学校指導要領解説音楽編』、21頁。

である。」¹²は、《第6番》の全体および各楽章に与えられた標題によって学ぶことができる。

指導要領解説 ②「音や要素の表れ方や関係性、音楽の構成や展開の有様などが、音楽の構造である。鑑賞の学習では、こうした音楽の構造をとらえることが極めて重要となる。」¹³および ④「音楽によって喚起されたイメージや感情などを、自分なりに言葉で言い表したり書き表したり主体的・能動的な活動によって成立する。」¹⁴は、第4楽章から第5楽章にかけての天気の変り変わりを聴き取ることを通して学習できよう。

指導要領解説 ⑤「人間の生活の基盤である風土や文化・歴史、伝統といった環境であり、音楽はそれらの影響を受けて成立」¹⁵することは、《第5番》と《第6番》を作曲した当時のベートーヴェンの精神的・身体的状況を知ることによって学ぶことができる。

さらにこの作品は、本稿で提案したい「他教科と関連させた横断的な音楽鑑賞」にも最適の教材である。本指導案においては、以下の6教科にまたがった横断的学習を試みたい。

音楽ではまず、《第5番》を通して通常の交響曲の構造を学び、それと比較することにより《第6番》の構造の特異性を学ぶ。次に曲の題名に着目し、《第5番》に人々が付けた俗称「運命」と、《第6番》に作曲家が付けた標題「田園」の違いを学ぶ。さらに《第6番》の各楽章に付けられた標題を意識しながら楽曲を鑑賞し、鳥の鳴き声や、様々な情景を聴きとり他者と議論する。またそれらを表現するために、どのような楽器が用いられているのかを考察する。

国語の観点からは、『ハイリゲンシュタットの遺書』を何の情報も与

12 【中学校指導要領解説音楽編】、22頁。

13 【中学校指導要領解説音楽編】、21-22頁。

14 【中学校指導要領解説音楽編】、23頁。

15 【中学校指導要領解説音楽編】、23頁。

えずに読ませ、どのような手紙なのか、誰が書いたのかを考えさせる。

道徳の観点からは、遺書を書いたあとベートーヴェンは自殺を執行したのか、なぜ死なずにふたたび大量の作曲をしたのか、を考えることを通し、彼の苦難の克服の課程を学ぶ。

地理および歴史の観点からは、ベートーヴェンの国籍、ハイリゲンシュタットのある国、楽曲に用いられている楽語などから、それぞれに関係する国の位置やその時代における国同士の関係性、および当時の芸術家たちのコスモポリタンな生き方を知る。

生物の観点からは、第2楽章に登場する3種類の鳥の種類と生息地や特徴を学び、さらにそれらの鳴き声については、技術の観点からインターネットの検索法を学びつつ調査する。

以上の学習の要点が『指導要領解説音楽編』第4章の2「内容の取扱いと指導上の配慮事項」の(7)イ¹⁶を網羅していることから、《第6番》は『新学習指導要領』が目指す鑑賞の姿に適した教材であることが裏づけられよう。

3. 2 研究授業実施校の実態

前述の指導案を通し、生徒を鑑賞の授業にどの程度主体的に関わらせることができるのかを調査するため、宮城県松島町立中学校の協力のもと、第2学年全3学級を対象に2時間の研究授業を行った。研究授業実施校を決定するにあたり、1) 附属中学校や有名私立中学校といった「選抜された」生徒で構成される進学校でなく、様々な学力の生徒が混在する公立中学校であること。2) 特殊カリキュラムなどの実験校・モデル校ではないこと、を考慮した。

事前に音楽科主任に対して行った生徒の実態調査によれば、この地域

16 【中学校指導要領解説音楽編】、80頁。

は非常に田舎であるため、仙台市街まで交通機関を使って出て行かない限り、演奏会などの芸術的な刺激を日々の生活の中で受ける機会は皆無に近い。そのため、一般常識として知っていそうな事柄でも知らない生徒の方が多い。また、自らの意見を発言するということに慣れておらず、鑑賞の授業で意見を求めても答えない生徒が多い。とくにクラシックを毛嫌いする傾向があり、鑑賞の授業の初めから生徒のテンションがマイナスになっていることが多く、「ええ長い嫌だあ」等の発言を多く耳にする。そもそもクラシックに対して、長くノリが悪く堅苦しいというイメージを抱いている、ということであった。

これらの問題点をふまえ、本研究授業ではとりわけ、こちらの問いかけに対して自らの頭で考え発言できるようになること、能動的に音楽を聴ける態度を養うこと、の2点を重要課題とした。

3. 3 学習指導案と指導法

本指導案は中学校2年生を対象とし、学習内容は『新学習指導要領』に準拠している。本来であれば4時間程度の時間をかけ、他教科との関わりをより深めるために他教科と合同の授業を行いたいところだが、学校側の年間授業計画を変えることは不可能であったため、音楽の授業枠内でのみ、50分×2時間の計画で、2週間にわたり実施した。授業はクラスごとに同一の指導計画案に基づいて行った。

授業においては、音楽を聴くことに集中させるために、楽曲鑑賞にはCDを用い、それ以外（要点の説明、作曲家や鳥や楽器の説明、鳥の鳴き声など）にはパワーポイントを使用して、視覚的情報を意識的に多く与えた。また、生徒には毎回プリント教材を配布した。1時間目は『ハイルゲンシュタットの遺書』の訳文全文¹⁷、《第5番》と《第6番》の楽

17 訳文は『ベートーヴェン大事典』94-95頁を使用。

章構成、ナイチンゲール、ウズラ、カッコウの絵を、2時間目は鳥の鳴き声を担当する楽器の種類と絵、《第6番》のオーケストラスコア¹⁸（第2楽章最後、第4楽章冒頭、第4楽章最後から第5楽章冒頭の部分）を配布した。パワーポイントの詳細および生徒への配布資料は紙数に限りがあるため、本稿への掲載は割愛する。

なお評価に関しては、指導案の評価項目に従って、授業を観察する音楽科主任が行う。

3. 4 授業における生徒の反応

全体的に見て、生徒たちは事前に知らされていた実態から予想していたよりもかなり積極的に授業に取り組み、自発的な発言も多くみられた。その一方で、意見を聞いた際に「分かりません」としか答えない生徒、集中力に欠けている生徒もわずかながら見られた。

1時間目は比較的答えが導きやすい課題であったため、自発的な発言や気づきが多かった。生徒にとっては有名な作曲家が書いた遺書を読む、という体験がとりわけ新鮮な刺激だったようで、少々難解な文章であったにもかかわらず、多くの生徒が熱心に読み考察していた。授業後のアンケートにおいても「遺書の存在は知っていたが読んだことが無かったので、読めてよかった。」という意見が複数見られた。また、物珍しさもあると思うが、パワーポイントを使った視覚的な効果に対しての反応は良く、飽きる生徒は少なかった。

1時間目の最後に、第2楽章に登場する3種類の鳥の鳴き声を調べてくる宿題を出し、2時間目の最初に発表させたが、各クラスとも宿題をしてきた者とそうでない者に大きく二分された。鳴き声の調査法としては、辞書を使った者、インターネットで文字検索した者、インターネットで

18 オーケストラスコアは全音楽譜出版社、ベートーヴェン《交響曲第6番「田園」》を使用。

資料1 音楽科学習指導案

音楽科学習指導案

平成 23 年 1 月 21 日、28 日

作成者：伊藤 綾

1. 学年・学級：第 2 学年 1、2、3 組 各 36、35、35 名
2. 場所：音楽室
3. 題材名：「ベートーヴェンの「新しい道」ってなんだろう?」
4. 教材名：L.v.ベートーヴェン《交響曲第 6 番「田園」》、《交響曲第 5 番》（補足教材）

5. 題材の目標

ベートーヴェンの《交響曲第 6 番「田園」》を通して、各楽章の標題の情景を感じ取り、その根拠となる楽器や演奏法と関連づけて、自分の言葉で表現することができる。

新学習指導要領 B 鑑賞 (1) ア、イ [共通事項] ア、イ

6. 題材について

題材観	<p>本題材は、新学習指導要領、第 2 章、第 5 節、「音楽」の B 鑑賞 (1) ア、イ [共通事項] ア、イおよび第 3 章「道徳」の 1. (1)、(4)、(5)、3. (2)、(3) を取り扱うものである。</p> <p>ベートーヴェンが「ハイリゲンシュタットの遺書」のあと、同時に作曲した《交響曲第 5 番》（絶対音楽）と《第 6 番「田園」》（標題音楽）を題材とすることにより、その楽章構造の大きな違いのみならず、音楽表現の豊かさや美しさを感じ取ってほしいと思い考えた。とくに《第 6 番》に登場するナイチンゲールはヨーロッパ芸術においては頻繁に登場する象徴的な鳥である一方、日本ではなじみの薄い鳥であることから、この作品を通してどんな鳥なのかを知っておくことも重要だと考える。</p> <p>また、当時のベートーヴェンの精神状況と危機の克服を知ることを通して、「目標に向かって希望と勇気を持ってやり抜く強い意志」や、「理想の実現を目指して事故の人生を切り拓いていく」を先人に学ぶことが出来ると考え、本題材を設定した。</p>
指導観	<p>指導にあたってはまず、ベートーヴェンの「ハイリゲンシュタットの遺書」を読ませ、これを書いた作曲家とその作品に対する興味をもたせる。</p> <p>次にその危機を克服した直後に書かれた 2 つの交響曲《第 5 番》と《第 6 番》の曲名と楽章名を見せ、大きな相違点を見つけさせ「絶対音楽」と「標題音楽」を理解させる。</p> <p>《第 6 番》の各楽章の標題がどのように表現されているか、とくに第 2 楽章と第 4 楽章を中心に、楽器の種類とその奏法を学ぶと共に、情景を想像させる。この作業を通じて、音楽用語や記号などを学ぶと同時に、各自がどのように音楽を感じたかを自分の言葉で表現させることにより、自己のイメージや感情を深め、他者と考えの共有が出来よう。また、ナイチンゲールとはいったいどのような鳥なのかを調べさせることにより、ヨーロッパ芸術の象徴的な鳥について、文学的な見地からも（国語と結び付けて）理解を深めさせたい。</p>

7. 生徒観

授業態度は真面目と言えるが、反応がない。人前で自分の意見・感想を述べるのがとても苦手に見える。そうかと思うと、習った歌を廊下で歌いながら帰っていく。単調な反復練習をさせると集中力が無くなる者が多い。大きな声で歌うが、「心を込めて」「美しく」といった演奏時の表現力には乏しい。文化的環境に恵まれていないこともあり、日常生活における音楽との関わりは無いに等しい。

音楽主任による以上の所見を考慮したうえで、本授業では題材目標でもある、音楽を聞いて感じたことを「自分の言葉で表現する」力を身につけさせるようにしたい。

8. 題材の評価基準

	ア. 音楽への関心・意欲・態度	イ. 音楽的な感受や表現の工夫	ウ. 鑑賞の能力
題材の評価基準	<ul style="list-style-type: none"> 作曲家の人生に関心を持って取り組んでいる。 各楽章の違いに関心を持って聴いている。 ナイチンゲールはどんな鳥か興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 楽器や楽曲構造の違いを知覚している。 	<ul style="list-style-type: none"> 各楽章の違いや、その移り変わりを感じ取って聴き、情景を思い浮かべている。
学習における評価基準の具体例	<p>① 「ハイリゲンシュタットの遺書」を読んで、作曲者がどのような精神状況にあったのかを想像・理解出来ている。</p> <p>② ナイチンゲールについて、本やインターネットを用いて自分で調べることができる。</p> <p>③ 各楽章の音楽的变化に関心を持って聴いている。</p>	<p>① 《第5番》において楽章ごとの速度の違いを聴き分けることができる。</p> <p>① 《第5番》と《第6番》の楽章数や演奏標語の違いを見つけることができる。</p> <p>② 楽器による鳥の鳴き声や風の描写を感じ取り、その特徴を言葉で表現することができる。</p>	<p>② 《第6番》第4楽章から第5楽章にかけての音楽の変化から情景の変化を聞きとり、言葉で表現することができる。</p>

9. 指導と評価の計画（全2時間）

時	学習内容	評価	
		評価基準	評価方法
1	<p>■交響曲の2つの種類を知ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ハイリゲンシュタットの遺書」を読み、誰が書いたのか考える。 ベートーヴェンの苦悩とその克服を理解する。 遺書のあとに書かれた2つの交響曲《第5番》と《第6番》の存在を知る。 《第5番》を通して、交響曲におい 	<ul style="list-style-type: none"> 「ハイリゲンシュタットの遺書」を読んで、作曲者がどのような精神状況にあったのかを想像・理解出来ている。(ア①) 《第5番》の楽章ごとの速度 	<ul style="list-style-type: none"> (ア①) 行動観察 ワークシート 発言内容 (イ①) 行動観察

	<p>ては速い曲と遅い曲が交互に並べられていることを聴き取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交響曲《第5番》と《第6番》の外見的な違いを探し、2種類の交響曲の存在と、ベートーヴェンの新しい試みを学ぶ。 ・第2楽章に3種類の鳥について説明。とくに、ナイチンゲールについて聞いた事や読んだことがあるか、どのような本に出てくるかディスカッションと説明。 	<p>の変化を聴き取る。(イ①)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・《第5番》と《第6番》の楽章数の違いや演奏標語の違いを見つけられる。(イ①) 	<p>ワークシート 発言内容</p>
	<p>到達目標：ベートーヴェンの苦悩の時期を知るとともに、その直後に書かれた2つの交響曲の外見的特徴を見つけさせる。</p>		
	<p>□ 宿題</p>		
2	<p>■ 課題を聴き取ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ナイチンゲールはどんな鳥か、発表と確認。 ・「田園」の第2楽章を聞き、カッコウ、ウズラ、ナイチンゲールの鳴き声が自分の想像通りか聴き取る。 ・どの鳥の声をどのような楽器で表現しているのか、楽器の種類と音を学ぶ。 ・第4楽章を聞いて、どのような音がどの楽器でどのように表現されているかを聴き取らせ、意見交換。 ・第4楽章から第5楽章まで続けて聴き、天気や情景の移り変わりを想像させ、各自の意見を発表。 ・ベートーヴェンの人生と課題との関連の話を締めくくる。 	<p>・ナイチンゲールについて、本やインターネットを用いて自分で調べることができる。(ア②)</p> <p>・楽器による鳥の鳴き声や嵐の描写を感じ取り、その特徴を言葉で表現することができる。(イ②)</p> <p>・各楽章の音楽的变化に関心を持って聴いている。(ア②)</p> <p>・《第6番》第4楽章から第5楽章にかけての音楽的变化から情景の変化を聞きとり、言葉で表現することができる。(ウ②)</p>	<p>・(ア②) ワークシート 発言内容</p> <p>・(イ②) 行動観察 ワークシート 発言内容</p> <p>・(ア②) 行動観察 発言内容</p> <p>・(ウ②) ワークシート 発言内容</p>
	<p>到達目標：様々な楽器の、様々な演奏法による音の違いに気付かせる。</p>		

画像検索した者に分かれた。これら3つの調査法が出てきたことは予想通りであったが、このような課題をどのようにして調査すれば良いのか、根本的に分からない生徒も少なくなく、他教科との連携が可能であれば、技術などの授業内で一斉に調査させる方が、すべての生徒が調査方法を身につけられたと考える。様々な楽器による鳥の声や、天気の違いや移り変わりの表現法に対しては、かなりの集中力をもって取り組んでおり、様々な情景を聞きとり想像できていた。ただし、発言を求めた生徒によっては、「恥ずかしい」「考えるのが面倒」といった考えから発言を導き出すのに時間がかかる場合もあり、その結果、考察という作業の最後に予定していた、標題と作曲者の人生の関係性については、十分な時間をかけて説明し理解させるまでには至らなかった。また1時間目に比べ、他の生徒の発言を待っている間に集中力が切れてしまう生徒も見られた。

3. 5 鑑賞の授業に対する生徒の意見

生徒たちは鑑賞の授業に対し、普段どのような意見を持っているのか、また今回の授業をどの程度理解できたと感じているのかを確認するために、2時間の授業後に生徒にアンケートを実施し、当日の欠席者および生徒会活動でアンケート実施時間に立ち会えなかった生徒を除く78人（男子38名、女子40名）から回答を得た。アンケート内容は以下の2点である。

資料2 鑑賞の授業に関する生徒へのアンケート

- I. 鑑賞の授業は好きですか？（好き／どちらかと言うと好き／どちらでもない／どちらかと言えば嫌い／嫌い、の中から選択）
その理由を書いてください。
- II. 今回の授業で新しく学べたことは何かありましたか？

設問Ⅰに対する回答は、鑑賞の授業が「好き」あるいは「どちらかと言うと好き」50名（男子19名、女子31名）、「どちらでもない」20名（男子14名、女子6名）、「どちらかと言えば嫌い」あるいは「嫌い」8名（男子5名、女子3名）であり、鑑賞の授業を比較的好む生徒の割合が、嫌う生徒よりも圧倒的に多かった。これは生徒の授業態度から受けた印象と一致する。

鑑賞を好む生徒の理由としては、「ミュージカルやオペラなどを聴くのが好き」「音楽の歴史を知るのが楽しい」「曲を聴いてその場面を想像するのが楽しい」という好みの問題から、「自分が知らなかった発見が授業を通して得られる」「つまらない曲でも知らないことを知れる、いい曲だと思えるようになる」「自分で調べるよりも深く学べる」といった知識欲の刺激を理由に挙げているものも少なくなかった。

反対に鑑賞を嫌う生徒の理由は、「つまらない」「楽譜が読めない」「難しい」という、音楽という教科そのものに対する拒否反応を示すものの他、「歌やリコーダーの勉強の方が好き」という学習内容の好みの問題も見られた。

「どちらでもない」と答えた生徒の理由は、「聴くのは好きだが、それについて深く考えるのは嫌」「飽きると眠くなる」「よく分からない」といった、鑑賞の授業のとらえどころのなさを挙げるもの、「鑑賞するものによって好き嫌いがある」「授業で扱う作品はつまらない」といった鑑賞対象によって興味が左右されるもの、また「授業は楽しいと思うが、『この話、何の役に立つの?』と思うときがある」といった、鑑賞教育の利益性を問題視する意見もあった。

鑑賞教育に対して上記のような意見を持っている生徒たちが、今回の授業を通して何か新しいことを学べたと感じたかどうか、という設問Ⅱについては以下の結果が得られた。

鑑賞の授業が「どちらかと言うと好き／好き」と答えた生徒は、ペー

トーヴェンの遺書、彼の苦悩とその克服、楽章構成、鳥の鳴き声の種類、楽器の種類、ベートーヴェンの生涯と標題との関連性、といった今回の授業で取りあげた学習のポイントのすべてが比較的詳しく列挙していた。

「どちらでもない」では3名、どちらかと言えば嫌い／嫌い」と答えた生徒には、それぞれ1名ずつ「新しく学べたことは何も無かった」、すなわち授業そのものに対して全拒否の姿勢をとる生徒がいた。その一方で、これらのカテゴリーに属する残りの生徒は「どちらかと言うと好き／好き」と答えた生徒に比べ簡潔な言い回しであるものの、意外にもこの授業の学習のポイントをしっかりと列挙できていた。このことは、鑑賞という行為自体に楽しみや喜びを感じることができないと本人は思っているが、何かしら印象に残っているポイントはあり、それが鑑賞という行為において興味を抱いた点であるということに、本人が気づいていない、または認めたくないという反応と解釈できよう。

そのほかの注目すべき意見としては、どのカテゴリーの生徒からも「パワーポイントのような視覚教材があると授業が理解し易く、楽しめる。」という意見が出された。通常この学校で授業時にパワーポイントが使用されることはなく、その機能自体が生徒にとっては印象的であり、また視覚情報として役立ったようである。

3. 6 研究授業を通して明らかになった改善点

研究授業を通して明らかになった本指導案の改善点は以下の2点である。

1点目は、2時限目に楽器の種類を学ばせる際、教室の設備の問題もあり映像を効果的に見せることができず、また各楽器の音色の聞き分けに他の教材を用いる時間もとれなかったことである。

2点目は、2時間目に考える課題を多く設定したために、最後の考察

「ベートーヴェンはこの交響曲で何を表現したかったのか？」にあまり考える時間を与えることができなかったことである。そのため、最後の考察テーマはこちらの用意した考えを、ひとつの可能性として紹介するだけに留まった。

これらの反省点から、本学習指導案には最低でも3時間が必要であり、2時間目で楽器の種類を映像と音から学び、3時間目でこの交響曲に対するベートーヴェンの思いについて各自に考えさせるのが余裕のある授業計画だったと言える。

4. 今後の課題と展望

本論文では、『新学習指導要領』に新たに組み込まれた教科間の横断的学習への言及に注目し、その可能性を指導案の作成と実施を通して考察した。今回は実施校のカリキュラムの関係で、教科の枠を超えて授業時間を取り、ひとつのテーマに関して横断的な授業を行うことは不可能であった。しかし、他教科との関連性を意識した授業は、生徒の音楽に対する興味および自発性を喚起し、鑑賞の好き嫌いに関わらず、その内容が比較的記憶に留待っていることが証明された。

将来、複数の教科を結び付けて授業時間を設定することが可能となり、余裕を持った計画のもと、ひとつのテーマをより深く広く扱うことが可能となれば、さらに生徒の興味を喚起し、意味のある授業として彼らの理解と記憶の促進にも繋がることになるだろう。他教科との連携は、すべての物事には何かしらの関連性があり、学ぶことに意味のないものは無い、という認識を生徒に持たせるのに重要である。また、自らの頭で考え自分の言葉で他者と意見を交換することは、世の中には答えが一つではないものもある、ということを知るきっかけとなり、その積み重ねを通して、様々な視点から物事を観察し冷静な判断ができるようになる。それこそが、詰め込み教育からの脱出であり、グローバルな視野を育成

することに繋がると考える。

『新学習指導要領』の完全実施まで、あと1年と迫ってきたが、今後、教科間の横断的学習の重要性がさらに意識され、カリキュラムや指導案の中で様々な試みや提案が行われるようになることを望む。

引用文献

- 中等科音楽教育研究会編『最新 中等科音楽教育法 中学校・高等学校教員養成課程用』、2009年、東京、音楽之友社。
- バリー・クーパー原著監修、平野昭、西原稔、横原千史訳『ベートーヴェン大事典』1997年、東京、平凡社。
- 文部科学省編纂『中学校学習指導要領』1989年3月告示、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/890303.htm。
- 文部科学省編纂『中学校学習指導要領』1998年12月告示、2003年12月一部改訂、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301c.htm。
- 文部科学省編纂『中学校学習指導要領』2008年3月告示、2010年11月一部改正、
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm。
- 文部科学省編纂『中学校学習指導要領解説音楽編』2008年7月、
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afield-file/2011/01/05/1234912_007.pdf。